



キャンパス点描―文理学部図書館



第14号

2020年
12月25日発行

日本大学国文学会

同窓会誌



現在の図書館は二〇〇四年九月竣工。以前は旧2号館（1号館に接続し、現存せず）の並び、現3号館の前あたりにあった。閉架式で、蔵書の質に見合わない極めて貧弱な施設だった。それが学部創設百周年を機に、多機能図書館としてよみがえった。

この時期、図書館が十分に活用できない不自由さはあるものの、図書館側としては臨機応変、可能な限りのサービス提供に努めている。私たちも上手に利用したい。



―図書館を支える職員の皆さん―

OB・OGだより

人生に漬かる

河口 玲菜

国文学科を卒業して約八年の月日が経とうとしています。とはいえ、私は大学院に進学をしたため、国文学科に足を運ばなくなってからは約六年というところ。

在学中は、昭和初頭に書かれた文章と闘うため、図書館に通い詰める日々を過ごしました。対象の作品がその時代の中でどのように読まれていたのかを考え、同級生や先生たちと意見を交わす日々。文字通り「文学漬け」の六年間を送りました。

文学に漬かりきった私は、卒業後は文学と全く関係のない業種で営業ウーマンになりました。大学院で培った(?) 弁舌でバリバリと数字をあげ、四年目には管理職に。文学漬けの日々から今度は「数字漬け」の日々を過ごしました。

四年間数字に漬かった後、様々な縁や偶然が重なった結果、現在は神奈川県のとある市で公務員をしています。この文章を書

いている今は、住民税を計算する部署で働いています。毎年変わる税制について勉強をしながら、四方八方から追ってくる様々な業務に勤しんでいます。市民の方の対応や、文章作成、事務処理等々。今の私は何漬けというよりは、たくさんの方の手に揉まれかき混ぜられる毎日です。

こうやって色々な物事に漬かって、様々な人や事柄に揉まれ混ぜられ。なんだか糠床の野菜のような気持ちで人生を過ごしています。人生百年時代の昨今、七十年後には一体どんな人間に漬かり上がるのか。美味しく発酵するべく、邁進し続けます。

[平成24年国文学科卒業]

社会人になって思うこと

小野塚 恵

卒業して明日から社会人、という時、この国文学科で学んだ様々な知識を、直接的に仕事で使うことはないだろうな、ただ四年間とても楽しかった、そんなことを考えながら、新人社員研修に臨んだ。

しかし、いざ社会人になって働いてみると、知識としての語彙を多く獲得している

ことや、物事を多角的に捉え、根拠を探し、仮説を立て推察すること、自身の分析に基づいた意見を、他人にわかりやすく説明し、時には議論をする中で、より良いものを生み出していくこと等、今まで携わった業務において、この国文学科で学んだ知識が必要だったことは、一度もなかった。

私は今、ハウスメーカーの経営企画職に就いている。経営企画という仕事は、数字や様々な要因に基づいて多角的に業績を分析し、経営目標や事業戦略を立案・実行まで導き会社の発展を図る仕事である。こう書くと、損益計算書等の数字ばかりを扱うなら、数字の知識の方が重要じゃないかと思われるかもしれないが、実はそんなことはない。確かに、簿記の知識は必須であるが、組み立てた戦略を実行に移せなければ、事業の成長も見込めず、意味がない。そこで、資料の文章をまとめる力や説得力、理解力や交渉力が欠かせないのである。

世間的ないわゆる「国語」に直接的に関わらないような仕事でも、実は役に立つことをたくさん学んでいたのだとわかった。国文学科で培った知識・技能は、今日私も助けてくれる。

[平成26年国文学科卒業]

わたしの仕事

ヨガインストラクター



ヨガに出会ったのは大学三年の夏だった。日本文学の勉強、新体操、バレエと、やりたいことをすべてやっていた私は、これ以上したことも、就きたい職業もなかった。ヨガには漠然とした興味があり、たまたま就活サイトで見つけた一日だけのインターンシップに参加した。その後、紆余曲折を経てインストラクターになる決心をした。

ヨガは未経験だったが、精神と肉体の両面をよりよくしていけるのではないかと、という直感があった。入社後約一ヶ月の研修期間で、ヨガの歴史や哲学、解剖学、生理学などを学び、六十分のレッススが提供できるような特訓した。誰にでもわかりやすい誘導、言葉遣いが求められ、新体操で培った体の使い方と、大学のゼミで養われた感覚や考えを言葉にする力とが両軸となり、その後のレッスン構成に活かされることになった。たった六十分のレッスンだが、不思議なことに今までの自分の生き方や考え方が反映されてしまう。指導担当のトレーナーから痛いところを突かれ、泣き出す人も多かった。あんなにも自分と向き合った期間はなかった。こうして最終テストに合格し、インストラクターとなった。

実際にレッスンを担当するようになって、目の前の生徒さんは私よりも長くヨガに触れている方ばかりである。未熟な自分がレッスンを料を頂いているというプレッシャー、知識・経験不足からくる自信のなさ、ヨガの果てのなさに呆然としながら、先輩のレッスンをひたすら受けて、よりよいインストラクターになろうとものがき続けた。

実は「ヨガが好きだ」と言えるようになった

たのは二年目に入ってからだ。ヨガ哲学を学び、初めはちんぷんかんぷんだったことがポーズの練習や瞑想によって腑に落ちたとき、幼少時からずっと抱えていた孤独感が癒えていった。そんな経験から、私はレッスンを通してその根底に流れるヨガ哲学を「体感」できるクラス作りを目指すようになった。

己の肉体で体感したことは何よりも強い説得力を持ち、日常をどう生きたらいいのか教えてくれる。生徒さんから私の言葉に救われたという声を聞き、自分がその人の生きる力になりえたと感じられた瞬間は、何にも代えがたい喜びである。

自分の人生がその時々で傍にいてくれた人の存在や言葉に支えられてきたように、私もヨガのレッスンや発する言葉を通して、誰かを支えられる存在でありたい。そう願って、ヨガの果てしない世界でもがき、時に無力さを思い知らされながら、今日もヨガを伝えている。

石上 優 平成3年2月生まれ、神奈川県座間市出身。平成25年3月国文学科卒業。同年4月からホットヨガスタジオ「LAVA」にてヨガインストラクターとして活動。趣味は、読書・コーヒーを飲むこと・インド占星術。

談話室

コロナ雑感

袴田 光康

今年の四月に本学国文学科に着任しました。キャンパス沿いの桜並木を歩いて校門をくぐると、歴史ある1号館の建物が静かに重く私を迎えてくれました。樺の巨木を見上げながら、国文学科のある7号館へと進み、その扉を開いた私は、新入生のような心持ちになったことを覚えております。初心に帰り、これからは心を入れかえようなどと不似合いな決意をした時には、これからコロナ禍という長いトンネルが待っているとは思いませんでした。

春から始めたZOOMの授業にも漸く慣れてきました。とは言え、私のような古いタイプの人間は、顔の見えない黒い画面に向かって一人相撲のように講義するのは、やはり苦手です。学生たちとの一体感をどういう形で取り戻すのか、それには経験を積み工夫を重ねていくしかないでしょうが、時として、学生が教室で船を漕いでい

た授業風景が懐かしく思えます。

私には気温差でクシャミが出るという妙な持病があるのですが、今や通勤電車の中でクシャミの一つでもしようものなら、忽ち周囲からの冷たい視線に晒される世の中になりました。マスクの下で鼻腔のムズムズ感と必死に闘いながら、コロナウイルスが世の中を変えてしまったことを日々実感しているわけですが、コロナ禍は私たちの社会の非寛容性や差別性ををも新たに映し出したように思われます。

「自粛警察」や「同調圧力」などの言葉を聞く度に、私は、幕末の「コロリ」騒動でその原因と噂された「アメリカ狐」を思い出します。「コロナ」と「コロリ」が似ているのは偶然ですが、当時の攘夷運動とも絡んで想像された妖怪への脅威と偏見は、感染症や伝染病に対するの眼差しが、昔も今もあまり変わっていないことを物語っているようです。

申し遅れましたが、私の専門は平安文学です。平安時代の病は怨霊や物の怪が原因と考えられていましたが、物の怪に取り憑かれているのも一種の「ケガレ」の状態で、加治祈祷を通して物の怪を調伏して「ケガレ」を払わなければならないと考えられて

いました。興味深いのは、当時の「ケガレ」観が感染症とよく似ている点です。「ケガレ」には、死のケガレ、血のケガレ、肉食のケガレなどの種類があり、種類によってケガレの期間が決まっていました。そのケガレは、「触穢」といって人や場所を介して他者に移るものと考えられていたのです。細菌やウイルスというものを知らない時代のことですが、この「ケガレ」観は感染症とそっくりなことに驚かされます。『源氏物語』に度々登場する物の怪たちについても嫉妬や怨恨だけでなく、差別という視点から考えてみる必要があるだろうと改めて感じています。

文学研究というものは、実社会から見れば無用の長物なのかもしれません。確かに新型コロナウイルスに対しても医療技術やワクチン開発で貢献できるわけではありません。しかし、コロナ禍が炙り出す世の中の歪みに対して文学テキストを通して闘う術はあるように思われます。私自身は文理学部国文学科の一員として、これからの時代をどう闘っていくのか、自問自答を繰り返しながら、今日もパワーポイントの教材づくりに追われております。

「国文学科教員」



ウイルスは何をもたらすか？

鈴木 雅裕

読

書

案

内

今なお、各所で猛威を振るうコロナウイルスについては、その日の感染者数、芸能人の感染者など報道されるように、世間の関心事である。こうした状況下において、コロナに関する書籍が多く出版されている。本稿でとりあげる山内一也『新版 ウイルスと人間』（岩波書店、二〇二〇年）も、その一つである。「新版」とあるように、本書自体の刊行は二〇〇五年に遡るが、コロナに関する知見が新たに加えられている。

タイトルに「ウイルスと人間」とある通り、並列される二つがどのように関わり合っているのかを、八つのトピックスで説かれている。当然、前提となるウイルスがどのようなものか、といった説明もされる（三〜五章）が、ウイルスと人間や現代社会との関わりを扱ったトピック（六〜八章）は、「ウィズコロナ」が標榜される最中、あらためて考えさせられる内容である。何より、最も興味が惹かれたのは、第二章の「進化の推進力となったウイルス」である。ウイルスと聞くと負の側面に目が行きがちだが、本章では正の側面にも焦点を当てていく。人が生存するためには常に多様性を必要とする。そして、ウイルスの祖先が多様性をもたらした面があることを本章では指摘する。一つの事例として血液型を挙げるが、A・B・AB型の血液型物質に対する自然抗体をO型が持つと説く。一方、O型物質に結合して攻撃する細菌も存在し、それらのせめぎ合いで血液型

のバランスが保たれると述べる。ウイルスがもたらした血液型の多様性によって、人類は生存と発展が可能になったのである。ちなみに、コロナウイルスの感染状況で、O型が重症化しにくい傾向にあるのは、このことに関わるのではないかと、とも推測している。

ウイルスは多様性を生み出し、進化を推進していく。このことは、生物学上に限ったことではないだろう。コロナは甚大な被害をもたらしているが、同時に、日本では普及度が低かったICT教育の領域で推進をもたらしたとも言える。対面での授業が叶わない状況では、オンライン形式を取らざるを得ず、授業システムや方法の面で困難な事態が待ち受けていた。だが、情報機器を活用し、試行錯誤しながら、乗り越える営みが繰り広げられた。十分に整った環境ではないものの、コロナと共存しつつ授業を行う道が拓かれた。また、対面授業の代替という意味合いが強いオンライン授業ではあるが、対面が再び可能となった時、オンラインも組み合わせるといって、授業の多様性が生まれるのではないかと。

ウイルスがもたらしたものは、決してネガティブなことだけではない。コロナと共に生きる世界の中で、そうした正負の両面を含め、ウイルスと人との関わりを考えていく必要がある。本書は、そのための有益な視座を提供してくれるに違いない。

「元助手・非常勤講師」

鈴木功眞ゼミでは、主に抄物やキリシタン資料、狂言台本といった中世末期の口語資料を用いて、日本語史についての研究を行っています。いわゆる現代語でも、古典文法でもない実際の日本語で、言語の歴



ー対面とオンラインを併用した後期ゼミー



鈴木ゼミ

(鈴木功眞先生担当)

火曜5限

史的な変化に対する意識を高め、現代の日本語の実態にも敏感になることを目指します。卒業論文のテーマは、表記、語彙、音韻、文法、文体と幅広く、また調査対象や時代も各自自由に決めることができます。

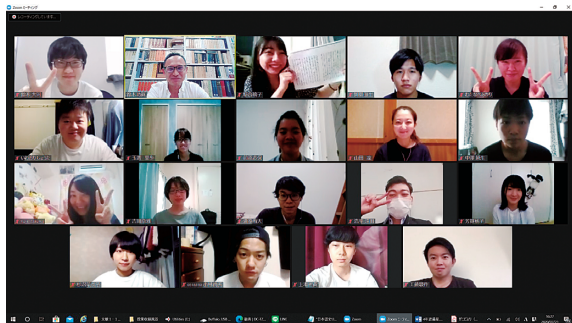
ゼミでは、前後期をそれぞれ二回に分けて、毎週二、三人ずつ発表を行なっています。第一回は課題の資料の翻字という解説と現代語訳（逐語訳）の作成を行なっています。第二回では課題資料で使用されている言語の日本語史的考察を各自の卒業論文のテーマに沿って発表します。考察発表の後には、質疑応答やディベートを行ない、それによって、それぞれの研究がより内容の濃いものになるようにしています。また、他者の発表を聞き、自身の研究に活かすことも目的の一つです。鈴木先生だけではなく、学生間での議論も主體的かつ活発です。

また、現在、オンライン受講と対面受講をゼミ生一人ひとりが選択できる環境が整っており、同時並行で授業を進めています。オンライン受講による発表やディスカッションも、パソコンやプロジェクトターを用いることで、従来同様の活発な議論を行うことができます。

授業外としては、例年夏休みに合宿を実

施し、そこで、四年生は卒業論文の中間発表を、三年生は第二回の考察発表を行ないます。他にも、定期的に大学付近で鈴木先生を交えた交流会を多く行ない、先生やゼミ生間での交流も活発です。学習以外にも就職や教職のことなど幅広く気軽に相談しあえるのも鈴木ゼミの大きな特徴です。

〔四年・岩織祥太、鈴木大河〕



ーオンラインのみで開講した前期ゼミー

1965年(昭和40年)

- 3月 1日『語文』第20輯刊行

3月10日気象庁富士山リーダーによる観測開始

4月 1日松尾拾氏が国文学科教授に、杉谷寿郎氏が同専任講師に、寒河江実氏が同助手に就任。秋葉安太郎氏が本学学長に、鈴木知太郎氏が文学部部長に就任。

4月 1日国産旅客機YS-11初就航

6月 6日日本サッカーリーグ第1回大会開幕

6月12日新潟で第二水俣病の発生を確認

6月12日家永教科書裁判、賠償請求

6月26日日本大学国文学会総会開催『語文』第21輯刊行

8月 9日シンガポールがマレーシアより独立

9月24日国鉄「みどりの窓口」開設

10月21日朝永振一郎ノーベル物理学賞決定

10月30日『語文』第22輯刊行

11月 8日「11PM」放送開始

11月10日東海原子力発電所が営業用発電を開始

11月17日プロ野球第1回ドラフト会議開催

11月19日戦後初の赤字国債発行が決定

12月18日日韓基本条約が発効し国交成立



YS-11型機

の本文研究・岡野道夫、⑤石狩川水系の文学・布野栄一、⑥「阿留辺幾夜宇和」と題する講演が行われた。



『朝日新聞』12月18日夕刊

【学内外の動き】秋葉安太郎氏が本学学長、鈴木知太郎氏が文学部部長に就任した。六月には日本大学国文学会が開催され、①万葉集巻三の採録・嵩元盛男、②源氏物語若紫巻をめぐること、③信貴山縁起巻の詞章・笠原伸夫、④実隆筆証本源氏物語、⑤「阿留辺幾夜宇和」と題する講演が行われた。

国文学科ヒストリー ⑭

【国内外の動き】東京五輪の翌年は、宇宙開発・ベトナム戦争、そして日韓基本条約等の締結に関するものが目立った。アメリカの「レーンジャー8号」が月面撮影に成功し、ソ連はアメリカの北爆開始、日本でのベ平連結成、アメリカのB-52爆撃機使用開始という展開となった。国内では日韓基本条約締結に際しての激論の末、12月18日に日韓の国交が成立した。また主要インフラの整備も進んだ。気象庁が富士山レーダーによる気象観測を開始し、戦後初の国産旅客機YS-11が初就航し、国鉄が「みどりの窓口」を開設した。一方で3月31日に淀橋浄水場が廃止された。跡地はその後、新宿新都心として高層ビル群となり、コロナ禍での都庁赤色ライトアップなど小池劇場の舞台となったことは記憶に新しいところであろう。そして戦後初の赤字国債発行が決定された年でもあった。文化面では帝人が日本初のミニスカート「ティンエン」を発売、テレビ番組「11PM」が開始した。

研究室訪問 一問一答

- ①好きなテレビ番組を教えてください。
「逃げ恥」「アンナチュラル」「MIU404」。

②最近買った高価なものとは？
4Kのテレビ、スピーカーセット（自慢）

③思い出に残る学生時代のアルバイトは？
テレビ局で深夜と早朝のニュース番組の手伝いをしていたこと。

④これだけは苦手だというコトをあげてください。
臭くなった猫砂のとりかえ。

⑤現在の職に就けなかったらどんな仕事をしていたと思いますか。
建築家。



紅野謙介（近現代文学専攻）研究室

掲 示 板

国文学科短信

来年の3月の卒業式や4月の入学式は開催可能か否か、気になる年末を迎えた。新型コロナウイルス流行の第三波を潜り抜け、先の見えない状況下で後期授業はあと数回を残すのみ。一部では対面式も試みられ、1年生もクラスの仲間と直接顔を合わせる時間が設けられたりもしたが、大学としてはこの一年間、オンライン式をベースに乗り切るしかなかった。学生も教職員もあと少しの辛抱か。

ところで、卒業論文の提出は年明け早々となるが、今回は郵送による提出も認められる。本誌発行の時点で、すでに詳細は知らされているはずだが、提出予定者は学科からの案内には十分に注意されたし。

第2体育館内の学食閉店。「チェリー」は数年前に業者が変わった時にプリペイドカード方式が採用された学食。国文学科としては学会の懇親会や卒業パーティーでお世話になった思い出の場所でもある。地階「福松食堂」は学部の学食としては一番古い。いずれ食堂を除く体育施設だけが3号館の横に新築される（写真撮影は助手の荒川真一さん）。



本館1階のラーニングコモンズ内に、カピバラとレッサーパンダの大きなぬいぐるみが点在している。これは公共スペースにおいていわゆるソーシャルディスタンスが自然に保てるようにするための工夫の一つ。紅野学部長みずから注文したものという。くれぐれもカピバラたちには優しく接するように心掛けたい（写真撮影は鈴木功眞編集委員）。

文理学部短信



同窓会員募集のご案内（郵便振替口座 00180-3-11183 日本大学国文学会）

国文学会では国文学科の卒業生（大学院・通信教育部を含む）を対象に同窓会員を募集中です。学会行事へ参加していただけるほか、機関誌『国文通信』を年2回お届けします。会費は郵便振替にて1,000円（2年分）から。振込用紙に卒業年次と「同窓会員入会」と明記してご送金くださいれば手続き完了です。国文学科サイトにも詳しい案内記事を掲載しています。

第14号
2020年
12月25日発行

〒156-8550
東京都世田谷区桜上水3-25-40
日本大学文理学部国文学科
国文通信編集委員会

紅野謙介・鈴木功眞・竹下義人
国文通信編集委員会

員というわけではない。念のため。
（義）

紅野謙介・鈴木功眞・竹下義人
国文通信編集委員会

編集後記

◆今号も新型コロナウイルス流行に翻弄されながらの編集作業が続いた。何より無事に発行できたことに安堵した。玉稿をお寄せいただいた皆様に厚く御礼申し上げる。◆巻頭の「キャンパス点描」は予定通りに図書館をとりあげた。上段・中段の写真三点は図書館事務課の佐々木凜平氏の力作。下段の写真は図書館職員の皆さんにお声がけて撮影に及んだ記念の一枚。残念ながら、持ち場を離れることのできなかった人もいたので、図書館を支える人々はこので全員というわけではない。念のため。
（義）

◆今号も新型コロナウイルス流行に翻弄されながらの編集作業が続いた。何より無事に発行できたことに安堵した。玉稿をお寄せいただいた皆様に厚く御礼申し上げる。◆巻頭の「キャンパス点描」は予定通りに図書館をとりあげた。上段・中段の写真三点は図書館事務課の佐々木凜平氏の力作。下段の写真は図書館職員の皆さんにお声がけて撮影に及んだ記念の一枚。残念ながら、持ち場を離れることのできなかった人もいたので、図書館を支える人々はこので全員というわけではない。念のため。
（義）